



町民文芸

只見短歌会

令和二年十一月詠草 大塚栄一

指導

離れ住む娘の帰り来て秋の日を我の届かぬ掃除なし行く

馬場 八智

高齢になれど畑作一心の義姉は押し車にて我にも野菜を

関谷登美子

病める身に楽しみなどはなけれども孫らの電話に元氣をもらふ

渡部ゆき子

横断に戸惑ふ私の農具持ち誘導しくるる工事場の人

目黒 富子

双子とふ玉子買ひ来て店員ら茹でし玉子を笑ひつつ剥く

新国由紀子

降雪に間に合わせんと農具など片づけたるも日の入り早し

渡部ヨリ子

雨少なき夏も終わるか早ばやと赤とんぼの群れ窓を飛び交ふ

新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会

十二月定例会

宇多喜代子

指導

雪降り樟脳匂う待合室
何もせず日の短きや老の暮

一穂

夕陽差す葱の重みはずっしりと
白菜の甘みを語る夕餉かな

修一

こむらひかがみ頼れる限り自然薯掘る
番鳥沈みつ浮きつ雪しまく

幸生

コロナ禍の師走の街を急ぐ人
身構えて古文書読むや冬日和

信

銀杏散る靴音踊る保育園
並べ行く所狭しと冬支度

都

九十も過ぎたる姉妹寄りし冬
始まりと終りも淋し除夜の鐘

洋子

風に濡れ横たわり咲く草の花
長き夜やなにげなく見る古時計

味代子

検診に向かふ車窓に冬の虹
あらがえぬ菜漬の石の重さかな

弘子

白菜に想いを託し鍋かこみ
孫の手にもみじ葉一つ笑い声

睦子

裸木となりて年輪あらたにし
先は先まずは三年日記買う

恒夫

祭祭と冬虹お社あたりかな
日めくりの一枚ごとの十二月

礼

